

テキスト・談話における引用表現について

高崎 みどり

1. はじめに——引用研究の面白さ

ここ数年、科研（注1）（注2）の研究テーマで、引用表現について研究している。具体的なデータに基いて分析すると、書きことばにおいても話しことばにおいても、引用表現は表現形式として頻用されている、ということがわかった。そしてそれらのデータ分析を通じて、なぜ、人は他人のことばを自分のことばの中にとりいれるのか？なぜ、引用でもないのに、「という」を連発するのか？そしてまたなぜ、自分のことばまで、引用表現にする必要があるのか。単に繰り返せばいいのに？等々の疑問や興味を持った。

そうした問題を解明するには、文単位の引用パターンの観察ではなく、より大きな単位を見渡す観点が必要となろう。従来の引用研究は、直接引用・話法と間接引用・話法について等の、いわば狭義の引用研究が中心であるようだが、筆者は、広義の引用表現研究に拡大して、言語行動としての引用行為まで視野に入りたいと望んでいる。ゆえにサイズとしても、文レベルよりは大きな、談話・テキストレベルで見ることとなる。

また、どちらかという、書きことば（＝テキスト）についての先行研究が多く、話しことば（＝談話）についてのものは少ないように思われる。ここではテキスト・談話双方における引用表現をみていく。

なお、ここでいう「引用表現」とは、典型的には

引用内容 + 引用形式

（助詞「と」：引用動詞「言う」「思う」など）

という要素を備えるものとし、具体的なテキスト・談話にとっては、何らかの異質の次元が持ち込まれることである、と捉えることとする。

2. テキストにおける引用表現

まずテキスト（ここでは「書きことば」という用語のかわりに「テキスト」という語を使用する）において、引用表現がどのように使われているかを概観してみよう。テキストにも種々のジャンルがあるが、いちおう、小説・随筆・論説の三種類に絞ってみることにする。

まず小説では、や手紙、会話文、心内表現などで多用される。テキストのいわゆる「多声性」(M. Bakhtin) という現象の一翼を担う。

随筆は、ノンフィクション・ジャンルであって、体験を実感的に伝えるために書き手の過去の言語行

動や、書き手以外の人物の発した言語を留め置くために、やはり多用される。

論説では、ある事実から出発して論理を展開する場合、事実としての誰かの、あるいは何かの言説がきっかけとなることが少なくない。のみならず、権威付け、根拠付けのために、ことわざの引用や有名人の発言など、既に発せられたもの、公的存在として認められたものとしての言説を、論理展開のどこかに布置することもある。

さらに論説では、引用行為そのものが批評的営為であるとすら指摘されている。松澤(2000)では「批評的営為とは、作品本文を断片的に引用し、新たな言葉をそこに付加しながら、本文とは別のテキストを紡ぎ出していくモンタージュ的な引用の実践の場」と述べる。

さてここでは、テキストにおける引用表現を見るにあたって、文章として、小説と論説の中間的特質を持つ随筆を材料にする。これらの随筆テキストでは、体験を伝えるために言語行動の描写が多いため、引用表現も多くなっている。たとえば、高崎(2007)では今回と同じ随筆資料(注1参照)の文末形式を調査したが、そのデータでもそれが裏付けられる。

これは500篇の『文藝春秋』「巻頭随筆」を調査した結果で、合計21,447個の文末があったのだが、それを最終述語(文の最終に位置する自立語以降をとる)のパターンで分類したものである。そこから、2,374種の異なり文末形式を得た。延べ語数の多い順から20位までを拾うと以下のとおりである。

- | | | |
|------------|--------------|-------------|
| 1. V た。 | 2. V。 | 3. V ている。 |
| 4. N である。 | 5. N。 | 6. V ていた。 |
| 7. N だった。 | 8. A。 | 9. ある。 |
| 10. 」 | 11. V ない。 | 12. N だ。 |
| 13. ない。 | 14. あった。 | 15. N であつた。 |
| 16. S という。 | 17. V たのである。 | 18. V なかつた。 |
| 19. V たのだ。 | 20. A た。 | |

*V は動詞、N は名詞、A は形容詞・形容動詞あるいはそれらに準ずるもの

S は文相当、」はかぎカッコ「」の終わりの部分

2,374種の文末のうち、頻度順上位10位に「(かぎカッコ)」、16位に「という」が入っているのである。すなわち、この随筆資料においては、引用形式が多用されているということがわかる。

3. 談話における引用表現

談話では、形態的に大きく分けて、独話(講義・

講演、語り物・語り芸など）と、会話（日常会話を典型とする）が考えられる。講義・講演などでは、たとえば先行の研究や作品に言及したり紹介したりすることがあるが、それに伴って引用表現が使用される。また、一方的に話し続けることの困難さから、一種の時間稼ぎのために「～ということになります」「～とっていいでしょう」「～とか～」等が多用される傾向も観察できる。その他、落語・講談などの独話にも引用形式は深く関わる。

日常会話においては、できごとの再現のため、あるいは話を盛り上げるために、話題の人物の口真似のようにして、一種の“演技”的な効果をねらって引用表現が使用されることが多い。

ここでは会話の方を対象とし、自然談話の文字化資料を材料にすることとした。

4. 方法

従来、テキストと談話を、それぞれ別の角度で分類・考察することが多かったが、今回、同一の角度から単純化することとした。それは、テキスト・談話の持つトピックの種類からの考察で、トピックの種別は、ストーリー的トピックと主張的トピックである。ストーリー的トピックとは、何かを物語ることが中心となるが、主張的トピックというのは、何かを説得的に主張することが中心となる。さきほどの分類で随筆は小説と論説の中間的なものとしたが、ストーリー的トピックを持つものが、小説に近く、主張的トピックが論説に近い、ということになるだろう。日常会話にはこの2種類が混ざって現れると思われる。また、随筆でも本研究で扱った『文藝春秋』「巻頭随筆」でも、一つの随筆にこの2種類が混ざり合う場合も少なくなかった。

分析対象は、『文藝春秋』「巻頭随筆」（注1に同じ）と、自然談話文字化資料（注2に同じ）である。これらにおいて、ストーリー的トピックのうち類似した話題を扱っている部分を選び、引用表現がどう使われているかを比較した。また、主張的トピックでは類似した話題が見当たらなかったため、〈提題—説述〉という、語り方が類似している部分を選び、引用表現を比較した。

5. ストーリー的トピックにおける引用表現の比較

今回の随筆テキスト資料に「母の死」（高橋源一郎『文藝春秋』2003年2月号「巻頭随筆」）という随筆がある（注3）。この文章は母親の入院そして死という切迫した出来事の大部分を、「私」と医師・看護婦や親族との会話で描き出している。全92文のうち39箇所引用表現があったが、すべて話し言葉としての引用である。その引用表現を見てみると次のような特徴があった（「第3文」などの文番号は原文の各

文にデータとして付したものの）。

1) 引用形式のタイプ

引用形式のタイプとして、「」なしの引用と「」つきの引用があった。

「」なしの引用では、以下のようにa・b2つの場合があった。

a. 肉声を感じさせずに、要約的に淡々と表現、地の文に溶け込む場合。

例：第3文；東京駅で母が倒れ、病院へ運ばれたという連絡だった。

b. 丁寧体やいい直し、人称のダイクシスの表現などを交えて、選択的に肉声を感じさせる場合。

例：第59文；あたしがきたからばあちゃんは治る、とSちゃんはいった。

いずれにしても、地の文と引用の境が曖昧になり、地の文に溶け込んで境が目立たなくなって、“肉声”が感じられない、という効果が生じている。

「」つきの引用では、終わりの方に「」が使われて、肉声として描写される場合が出てくる。

例：第88文；「ごころうさん」と弟はいった。

例：第89文；「やっと休めるで」とわたしはいった。（大阪弁であることに注意）

しかし、談話における場合とは異なって、テキストでは「」つきでも“声（こえ）”を伴わない。

2) 形式化した引用表現

「～と言う」の擬似的引用表現、すなわち形式化（注4）は稀であり、「という」は実際に「～と、言う」のである。しかし表記はすべて、形式化のマーカであるはずの「いう」を使い、ひらがな書きとなっている。

3) 引用動詞

引用動詞として、「言う」以外に言語行為に関する動詞「訊ねる」「告げる」「説明する」「答える」を使用している。しかし、心内引用の「思う」は第61文「良かった、とわたしは思った」の1箇所のみである。

4) その他

また、「～と〇〇はいった」という主語を引用形式ではさむ文末が多く、リズムカルである。

似た話題で展開される会話が談話資料Ⅱにある。これは、A・B・C・D4人の大学の同級生だった30代の女性の会話で、共通の知人Eが病気になるるとき、みんなで心配したことが話題になる部分がある。

【例1】

36	D	EのでもEのは(.)結構衝撃的だったな
37	A	そう だってちょうどさ[2年前に]クラス会になんかEちゃんが入院してる
38	C	[知らなかったから]
39	A	みたいなよね みたいに言ってたんだよね
40	B	そうそう 連絡がつかなくて(.)あれFさんが
41	A	あ そう言ってたね
42	B	ねえ 連絡がつかないって言って
43	A	うん
44	B	一生懸命ねえ やってくれて:
45	A	うんうんうん
46	B	それでお家に電話したんだけど なんかいまひとつ こういい雰囲気じゃなかった
47	A	ああ
48	B	っていう感じで話してたんだよ
49	D	うん 今ね家にいません実家にいます
50	A	うんうん あ そうそう
51	D	って言われちゃって:
52	A	あ うん
53	D	それで実家にいる:↑って で なんかうーん↑っていう感じだったんだよね
54	B	うんうんうん
55	A	う:ん そうかそうか
56	C	でも見つかって良[かったよね]
57	不明	[良かったね]
58	D	本当に本当に

*40Bの「Fさん」は友人の一人だが、この場にはいない。

このあとしばらく他の話題に流れていき、ずっとあとでまた再びこの話題に帰ってくる。以下の部分である。

【例2】

920	D	(7)私:自分がブー太郎 完全にブー太郎だったときもあるし:すごい:仕事が忙しかったときもあるし:なんだけど:外側からみんな いいね:すごいね:って言われるのと:自分の:感覚が:合わない
921	A	ああ うんうん
922	D	ことが多くって:で:例えば(ふ)とか辞めてブー太郎して:で:せい 生計的にも:困っててもすごい 晴れ晴れしてたりとか:自分が(.)だから:こう いい状態っていうか幸せな状態っていうのは結局自分 がどう思うか:かな:と思う
923	不明	う:ん
924	D	だから:あの Eちゃんなんかも病気ですごい大変だと思うんだけど:やっぱり:言わないで:あの: 病を抱えてる人もたぶんいると思うんだよね 中にはね そうすると:う:ん なんて言うかなあ そ そのことの事実よりも:
925	不明	う:ん
926	D	それをどう:受け止め[てるか]
927	B	[う う:ん]
928	D	っていうことの方が
929	B	うん
930	D	おっきいんだなあって]
931	不明	[うんうん]うんうん
932	C	E、退院できて良かったと思うよ
933	D	[ね:]
934	A	[ね:]
935	B	ほんとだね
936	C	たぶんすご:く浄化して帰ってると思うよ]

937	不明	[hhhh]
938	不明	うんうん
939	D	あのさ 雪が 雪が降ってて豪雪で：なんか流されて[行く]っていう
940	不明	[う：ん]
941	D	あのへんすごい良く分かるような気がした

以上の会話の、36D～58D までと、924D～941D までの合計 51 発話中 17 箇所 (920D と 922D を除く) に引用表現がある。ここには色々なタイプの引用表現がまざっている。

1) 引用表現のタイプ

丁寧語を使用するなど真似的に引用する、テキストでの“直接引用”にあたる表現がある。49D・51D がその例である。この場合“声”を伴うため、無色の伝達ができず、話し手の態度が現れたものとなる。一方、談話における引用形式の特徴として、テキストにおける「」等を使った直接引用ほどその始まりが明確でないことがあげられる。たとえば、930D「おっきいんだなって」は「思う」が省略されている心内引用表現だが、それがどこから始まるか、つまり「と思う」という引用形式が受け止める引用内容の始まりはどこかとなると、924D のどこからかと思われるが、少なくとも「そのことの実事よりも」という部分を聞いているときには、それが引用の内容のはじまりかどうかは不明なのである。

引用表現の中にまた引用表現が入る二重引用の場合もあって、それには 2 つのタイプが観察される。

- 伝聞がさらなる引用形式に含まれ、修飾—被修飾のような関係になっている (37A・39A)。
- 心内引用が、さらなる引用形式に含まれ、修飾—被修飾のような関係になっている (46B・48B)。

これらの場合、1 つの引用形式が 2 発話にまたがる場合が多く、その間にはあいづちや重なりが入っていることがある。37A と 39A や、46B と 48B もその例にあたる。

また、40B から 48B までを診ると、B がいくつかの引用表現を数発話にまたがって使用する間に、41A「あ そう言ってたね」と、分割される 2 人の「渡り台詞」のように引き取られる引用形式も見出せる。これも一種のあいづちの表現といえよう。

2) 形式化した引用表現

形式化した引用表現も多用され、922D「こういう状態っていうか幸せな状態っていうのは」は取りたての助詞のような働きをしており、924D「なんて言うかなあ」はフィラーのような働きをする引用形式である。

3) 引用動詞

引用動詞としては「言う」以外に、「思う」があり、心内引用の形で自分の判断を述べる。924D「E ちゃんなんか病気にすごい大変だと思うんだけど」がその例である。932C「E、退院できてほんとに良

かったと思うよ」、936C「たぶんすご：く浄化して帰ってると思うよ」のような例もある。すなわち、これらの例においては、ある出来事の体験が、それによって引き起こされた話し手の現在の感情的反応、すなわち心内の言語化の引用として語られたことになる。出来事自体についての話し手の感情や評価が引用形式で語られているのである。

形式の現れ方も多様であって、たとえば、51D「つて言われちゃって」は受身形の引用動詞の形である。「～っていう感じ」(48B・53D) のように、いったん「言う」で言語化して外に出し、「感じ」という名詞でそれは自分の内部の感情にすぎない、と内に入れてしまうような形式もある。

4) 比喩に近い引用表現

比喩のように働いている引用表現としては、939D「雪が降ってて豪雪で：なんか流されて行くっていう」は、引用形式にのせて語られている。これは、引用形式が、比喩と接近していることを示す。そのことは、次の例を検討するとよくわかる。1) でみた 48B「っていう感じで話してたんだよ」が本来なら「～と話してた」という引用形式になるところを、「～っていう感じ」を入れることで、一種の類似に基づく比喩であるようなニュアンスを持たせて、「話してたんだよ」を修飾する働きをするのである。

このように、談話における引用表現は、非常に多岐にわたって複雑にさまざまなかたちをとって使われ、それによって感情表明の交換、感情の共有が行われていることがわかる。それに比べて、テキストの方は、そこで交わされた会話のみの引用表現であり、それが一定の距離を置いた、描写的な表現として効果をあげ、結果として読者と作者の感情の共有が実現している。

また、根本的な相違として、さきほどテキストのところで触れた“声”を伴うかどうかの違いも大きい。談話の場合には“声”を伴うため、無色の伝達ができず、話し手の態度が現れたものとなる。たとえば、さきほどのテキスト「母の死」のところで、

例：第 89 文；「やっと思えるで」とわたしはいった。

を挙げたが、その少しあとに「この一週間、病室ではずっと大阪弁で話していたのだ。」と明かされる。しかし、この随筆中の引用文からは、この第 89 文以外、大阪弁のニュアンスは排除されている。一方、同じ大阪弁の談話の方を見てみると、談話資料 I (注 2 参照) 中の会話に

【例3】

87	A	あ 大阪ね
88	B	(・・) ったし: <u>道頓堀でも行こうか: 言うて 道頓堀のほうまで見にいった:</u>
89	A	うんうん
90	B	帰り: hhh べろべろになって: それ(・・)勝手に取ってるやんか↑
91	A	うん
92	B	こんな: hhh なんか変なおっさん二人 前(h)か(h)ら(h)来(h)て: hhh
93	A	うん
94	B	<u>お前ら何しとんのか ていきなり来て:</u>
95	A	うん
96	B	<u>いや ただ今から帰るところですつって:</u>
97	A	うん
98	B	<u>俺ら今から遊びに行くから お前 ちょっと付き合えや とか言うて</u>
99	A	[hhhhhhh]

【資料Iから A・B・Cは10代男子学生、Dは10代女子学生 クラスメート同士。Bは2歳まで福岡、18歳まで大阪府に在住】

下線部の引用は大阪弁の“声”で表現されているのである。そこにはできごとの面白さ、滑稽さを伝えようとする話し手の表現態度が現れている。

第29文 一応、真理や学術を探究するといっている手前、むやみに無内容で、時には間違った話に闇雲に相槌を打つわけにもいかないからである。

6. 主張的トピックにおける引用表現の比較

次に、同じく巻頭随筆「気配りとずるさ」(山内昌之 2001年4月号)をとりあげる。この文章は、竹下登という政治家が書いた『政治とは何か』という本を紹介しながら、その政治家について論じている。“政治の世界では、気配りとずるさは紙一重である”という主張が中心となっている。全43文中34箇所での引用表現がある。大部分がこの本から、すなわち書き言葉からの引用である。その引用表現を見てみると次のような特徴があった。

1) 引用形式のタイプ

引用形式のタイプとして、「」なしの引用と「」つきの引用があった。「」なしで、原テキスト(『政治とは何か』)の内容を、簡略化・要約化して取り込んでいる場合の例。

例: 第7文; 故竹下氏は、最初に島根県議会に入ったときから、いずれ代議士になろうと思っていたから、功をあえて人に譲ろうとしたとあけすけに語っている。

「」つきの引用では、原テキスト(『政治とは何か』)を引用している場合、あるいはそのような印象を与える。次の例がそれである。

例: 第15文; 事実、自分で「僕も相当ずるい点もあったんですね」と認めているほどののだ。

一方、出所を特定できないテキスト、あるいは架空のテキストを取り込む場合が5箇所あった。

第1文 他人への気配りは日本人の美德といわれてきた。

この「架空のテキスト」の場合以外は、“政治の世界では、気配りとずるさは紙一重なのだ”という主張の根拠として、主として竹下登氏の著書が引用されているということになる。もともと書評という論説は、先にも松澤(2000)の指摘のように、引用表現によって成立するテキストである。しかしその原著書の切り取り方や、敷衍の仕方は、評者の主張に沿ったものとなり、決して原著書の文章の再現を目指しているわけではない。第15文のように「」の直接引用を、「事実」「ほどののだ」とする位置づけの部分や、第7文の要約的な部分は、それぞれ、この評者の主張の言述部分にストラテジ的に配置されている。

すなわち、引用表現は主張の根拠となる事実の“事実らしさ”を証するものとして使用されている。

2) 形式化した引用表現

「と言う」の擬似引用的表現すなわち、形式化した「という」が12箇所ある。

例: 第8文; 委員長になったり、代表質問をしたりといった目立つことはしないのだ。

3) 引用動詞

引用動詞として、「言う」以外に言語行為に関する動詞「語る」「認める」「論ず」「紹介する」を使用している。心内引用の「思う」も使用されている。

また、「言われてきた」という受身形や、

例: 第39文; 竹下氏が外交を常識のやりとりという時、交渉とは気配りとずるさの入り混じった芸術かもしれないという気がしてくる。のように、「～という気がする」の形もある。

それに対して談話のほうはどうか。テキストと同じ話題というわけにはいかないが、ある主張を引用形式を多用して展開している部分を見てみよう。

談話資料Ⅲの大学教員3人(50代男性A、40代男

性B、30代女性C)が若者言葉を話題に話している会話の中に、Bが“「～の方から来ました」という言い方はおかしい”、と主張する部分がある。

【例4】

896	B	いや ここで 突然 その 話が 変わ 変わってというか その 婉曲表現を うまく 利用した 詐欺 <u>っつ</u> の あるじゃないですか
897	A	詐欺?
898	B	あの 私 消防署の方から 来ました <u>っ</u> っていうのがあるじゃないですか]
899	C	[あ: hhhh]
900	A	[(・・・)]
901	B	[そうです] 警察の方から 来ました とか
902	C	[う: ん]
903	B	あれね: hh 最初に考えたやつは すごいな: と [思うんですよ]
904	A	[う: ん]
905	C	[う: ん]
906	B	だって 消防署の方から 来ました <u>っ</u> って 言っても [(・・) わけでしょ?]
907	C	[う: ん]
908	B	でもね: h 聞いてたらね: hh 警察呼んでも 警察 警察の方から 来ました <u>っ</u> っていうんだよね
909	A	[hhhhhhhhh]
910	B	[hhhhhhhhh]
911	C	[hhhhhhhhh]
912	A	本物の 警察官も それは [面白い]
913	B	[(・・) 警察の者ですが とか]
914	C	うん
915	B	何々署の 者ですが <u>っ</u> て 言えばいいのに 警察の方から 来ました <u>っ</u> て
916		[ほんとに hhhh]
917	A	[おま お前も 詐欺だ <u>っ</u> ていう]
918	B	そうそうそうそう そう 帰れ <u>っ</u> ていう[hhhhh]
919	C	[hhhhh]
920	B	制服警官だったけどね [帰れ お前は <u>っ</u> て hhh]
921	C	[う: ん hhh]
922	A	[いや]
923	B	怒ったこと あった
924	C	[hhhh]
925	A	[う: ん]
926	A	[おかしいよね]
927	C	[hhhhhh]
928	B	まあ それは 警察官だったら 警察の方から 来たんだろうけども
929	C	う: ん
930	B	警察の方から <u>っ</u> て方角が 問題なんじゃなくて [どこに 所属するかって]
931	C	[う: ん]
932	B	というのが問題なんだ <u>っ</u> て 言 <u>っ</u> て
933	C	[う: ん]
934	A	[うん]
935	B	ほんとに 帰れ <u>っ</u> て 言 <u>っ</u> たことあるもん 僕
936	C	[h hhhhh]
937	A	[hhhhh]
938	B	[あの やっぱり 引越すと あの 知らない人が 来るじゃないですか]
939	A	うん

940	B	一応 なんなん何の (・・)ですとかつて で 警察の方から来ましたって言って 方から来たのか [帰れてね]
941	C	[h h h h]
942	B	若いやつ だったからさ [h h h h h]
943	C	[h h h h h]
944	A	あ：：
945	C	それは ほんとに 警察官だったんですね
946	B	そう
947	C	[ですよね いんですよね h h h h h]
948	B	[h h h h h たぶん 分かんないけどさ]
949	A	え 小道具だったんじゃない
950	B	分かんない [h h h ほんとは 手帳屋だったかもしれないさ]
951	C	[h h h h h h]
952	C	[ふ：ん]
953	A	[う：ん]そこまで 来たかって でも こっちも めんどくさいけど いちいち あの 言わないじゃない 直さないじゃない
954	B	[うん]
955	C	[うん うん]
956	B	そうそう

ここでは、「警察の方から来ました」という表現が問題になっているので、どうしても何度も引用せざるをえないわけである。61 発話のうち 22 箇所の引用表現が拾える。それらの特徴を見てみる。

1) 引用表現のタイプ

まず、口調などを含め、再現的に引用表現が使われている場合がある。940B「一応 なんなん何の (・・)ですとかつて で 警察の方から来ましたって言って 方から来たのか 帰れてね」のように「です」・「ます」を付して、直接引用的に、口調を再現しようとする部分も持ち、“ほんとうらしさ”を強化するために引用表現が使われている。また、935B「ほんとに帰れて言ったことあるもん僕」のように、引用表現が事実報告として使用され、それが、主張の根拠として置かれることがあるのである。

自分の言葉を引用する自己引用もみられる。920B・923B「制服警官だったけどね [帰れ お前はって h h h] 怒ったこと あった」のように、自分が過去に実際言ったことの引用、すなわち事実報告としての自己引用が生じている例である。

またこの例 4 には、架空の引用表現が多用されている。この話題の部分では、“「警察の方から来ました」という言い方はよくない”という主張が述べられているのだが、その「警察の方から来ました」は、ある特定の誰かの発話でなく、架空の引用表現である。いわばある「詐欺」方法の代名詞のように扱われているものである。架空の引用表現の存在は、引用表現がしばしば事実報告として使用されることがあるからこそ、“ほんとうらしさ”の演出のために、生じているものと思われるのである。

915B「何々署の 者ですがって 言えばいいのに」

も架空の、想定としての引用表現であり、主張を展開していくときの仮定として働いている。

架空の自己引用もあって、918B「帰れていう」のほか、Aも917「おま お前も 詐欺だっていう」や953などがあって、これらの引用表現は後でふれる比喩としての引用表現に限りなく近い。

1つの引用表現が2発話以上にまたがる場合も多いが、これもBの主張展開にあいづちがはさまるからである。913B・915B、920B・923B・930B・932B・935Bなどである。引用始まりが不明確である現象も生じており、たとえば、928Bから932B「いうのが問題なんだって 言って」の引用形式「って言って」の引用内容の始発がどこなのか、不明である。

2) 形式化した引用表現

896B「話が 変わ 変わってというか」はフィラーに用いられた引用表現で、930Bや940Bには取り立て助詞的に「って」という引用形式が使用されている。

3) 引用動詞

「言う」以外の引用動詞として、「思う」(903B)、「怒った」(923B)があった。

4) 比喩に近い引用表現

898B「私 消防署の方から 来ました っていう」のは、架空の、ある状況で使われると設定された「消防署の方から 来ました」という引用内容で詐欺行為の主要部分を代表させており、それに加えた「っていう」の引用形式とあわせて、提喩のような働きを担っているものと考えられる。

こうした主張的トピックにおける引用表現の使い方は、主張についての説明をより具体的に行うことができ、共感も得られやすいのであると思われる。B

の発話にこれらの特徴的な引用表現がよく現れているのは、この談話で B が、主張する役割を担っているからであろう。すなわち、主張展開の方略として、事実としての引用と架空の引用が入り混じり、また、いくつかの発話にまたがって 1 つの引用表現が完成し、そして完成してもその引用の始発がどこであったのか不明である、という、非常に複雑な引用の様相が見られるのである。

7. まとめ

実際の材料を分析すると、引用表現というのは、予想以上に複雑で多様な様相を見せることがわかった。特に今回は、談話表現における引用表現というものの実態が、非常に興味深くまた、考察するに値するということが実感できた。

ストーリーでも主張でも、事実らしさを証する手段として、いわゆる直接引用的な引用表現が使われるが、それは、また架空引用をも存在させるメカニズムであるということにもなる。肉声の強弱も調節可能である。書き言葉でも原典の引用紹介の直接性の加減を調節できる。

また、引用内容を、語りの“地の文”に溶け込ませたい場合、ないしは、自分のことばとして始めたのに途中で方針変更して引用としたい場合などに、引用の始発を曖昧にする、あるいは曖昧にできるということも興味深い。結果として入れ子型に二重引用が生ずることともなる。書き言葉でも「」と『』が用意されていることで、二重引用は前提とされている。また、書き言葉でも地の文と連続的に境を曖昧にする入れ込み方が可能であることもわかった。

このような引用表現の多様性、また引用表現が頻用されること、あるいは引用動詞として「言う」が突出して多く使われることが、「～という」など引用表現の形式化をも呼び込んでいる。「～という」の形式化は類似に基づく比喩表現にもつながる。心内引用も同様に、自己の心内の引用というよりは、婉曲や緩和として付加され、形式化しているとも言える。

ストーリー的トピックと主張的トピックという 2 種類のトピックを見ただけでも、引用表現が、テキストや談話の目的にかなうように、選択され、配置されていることが観察できた。今後ともこうした実態の観察を続け、引用という言語行為の意味するものについて考え続けていきたい。

注

1. 随筆テキスト(『文藝春秋』1999年4月号～2003年8月号「巻頭随筆」500編、延べ500人の書き手による)を材料とした引用表現の研究(平成15・16年度科学研究費補助金・基盤研究C「日本語の談話における結束性」高崎みどり研究代表)。今回はここで作成したデータから2編を使用している。

2. 自然談話資料を材料にした研究(平成19年度～21年度科学研究費補助金 基盤研究C「言語行動としての広義引用表現の研究」高崎みどり研究代表)。今回使用した自然談話文字化資料の内容は以下のとおり。

資料Ⅰ 首都圏大学生4人(10代 男子3名A・B・C、女子1名D クラスメイト同士)が、夏休みに体験したできごとを話題にして話している。約15分で603レコード。
資料Ⅱ 30代の女性(学生時代の友人同士)の4人E・F・G・Hが、雑談をしている。約30分で1143レコード。
資料Ⅲ 首都圏大学教員3人(50代男性A、40代男性B、30代女性C)が若者言葉を話題にして話している。約50分で2098レコード。

以上の談話資料からの例 1～4 中の記号について――

「(・・)」は聞き取り不能な発話で、相対的な長さを点線の長さで示す。「↑」は上げイントネーション、「:」は直前の音が引き延ばされていることを示し、:数は引き延ばしの相対的な長さを表す。「hhh」は、たとえば笑いのような呼気音を示し、h数は呼気音の相対的な長さ、「(h)」は呼気音がことばに重ねられて(笑いながら言う、といった場合)いることを示す。「[」は参加者の音声の重なりが始まったことを、「]」は終わったことを示す。番号はライン番号。この文字化の基準は、【串田秀也・定延利之・伝康晴『活動としての文と発話』ひつじ書房 2005年】などを参考にさせていただいた。

3. これらの随筆に関しては許諾の関係から、全文ではなく、梗概のみ示す。詳細は、高崎(2007)を参照のこと。
4. 引用表現の形式化とは、引用表現が、“引用する”こと自体以外の副次的効果や機能として文脈中に発現したものをさす。以下の①～⑦は、引用形式の、引用の機能以外の副次的な機能について指摘している先行研究から、高崎(2010)でまとめたものである。

- ① 提題の形で心理的距離を示す。発話末で伝聞・自嘲・説得など終助詞的に働く。発話冒頭で順番取りの手段として働く。――鈴木(2007)
- ② 断言を避けるという消極的態度を伝達――石塚(2004)
- ③ 言明・宣言としてのメタ言語表現で、苛立ちや批判の意図を示す――加藤(2002)
- ④ 情報源の種類により、擬似伝聞・問い返し・真意尋ね・態度表明などとなる――金善真(2004)
- ⑤ 発話内容が、現在の発話の場に属さない、異場面の「物語」であることを表示する。推論過程を経て得られた結果を表示する。――加藤(1998)
- ⑥ 情報に対する距離を投影――澤西(2002)
- ⑦ 名付け・伝聞・つなぎ――中島(1990)

さらに、藤田(2000)・松木(2001)・丹羽(1993)などでは、意味的にも、引用とはいえずに、かなり形式化して、他の機能を発現しているケースについて論じている。藤田(2000)を受けて、松木(2001)では、引用機能を喪失し、複合辞的な表現形式に変化している「接続助詞的」な「～といえば」「～といっても」、「助動詞的」な「～と

いう」「～と見える」、「連体修飾のつなぎの役割」の「という～」などに注目する。丹羽（1993）では、名詞を受ける「X トイウ Y」と、文を受ける「S トイウ」について、前者は、名前と対象を同定する基本的意味を持つこと。後者は、発話・内的発話を引き写すものが基本だが、具体的な発話という面を失って、伝聞を表すもの、事柄を既存のこととして表す用例のあることなどを指摘している。本研究ではこれらを参考にして、「引用表現の形式化」をできるだけ幅広くとって見た。

参考文献

- 石塚京子 2004 「話し言葉における『という』の語用論的考察——話し言葉のデータベース『日本語話し言葉コーパス』の分析を通して——『日本語教育学会（東海大学）予稿集』
- 加藤陽子 1998 「話し言葉における引用の『ト』の機能」『世界の日本語教育』8
- 加藤陽子 2002 「Face Threatening Act を明示するメタ言語表現について—討論形態の談話の分析から—」『日本語科学』11
- 鎌田修 2000 『日本語の引用』ひつじ書房
- 金善眞 2004 「日本語の文末引用形式について」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』17
- 澤西稔子 2002 「伝聞における証拠性、及びその特性——『そうだ』『らしい』『とのことだ』『ということだ』『と聞く』の談話表現を中心に」『日本語・日本文化』28 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 鈴木亮子 2007 「他人の発話を引用する形式」『言語』36-3 大修館書店
- 砂川有里子 1988 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9
- 高崎みどり 1994 「ストーリー的トピックと一般論的トピックのレトリック」財団法人東京女性財団 1993 年度助成報告書『職場における女性の話しことば—自然談話録音資料に基づいて』
- 高崎みどり 2007 「随筆テキストの文章特性」高崎みどり・新屋映子・立川和美『日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房
- 高崎みどり 2010 「自然談話の中の引用表現の実態と分析」『お茶の水女子大学 人文科学研究』第6巻
- 田中章夫 1978 『国語語彙論』明治書院
- 中島孝幸 1990 「『という』の機能について」『阪大日本語研究』2
- 丹羽哲也 1993 「引用を表す連体複合辞『トイウ』」『大阪市立大学文学部紀要 人文研究』46 第一分冊
- 藤田保幸 2000 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 松木正恵 2001 「引用と話法に関する覚書」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47 第三分冊
- 松木正恵 2005 「引用と話法」『日本語学』24-1 明治書院
- 松澤和宏 2000 「文学史の誕生—ロラン・バルト」『文学』1・2月号
- メイナード、泉子・K 2004 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- メイナード、泉子・K 2005 『談話表現ハンドブック』くろしお出版
- Bakhtin, M.M. 1981. *The Dialogic Imagination*. Ed. by M.Holquist and trans. By C.Emerson and M.Holquist. Austin :University of Texas Press.

本稿は、講演の内容（パワーポイントスライド）に加筆、多少順序も入れ替えたものである。

講演のあとで、北京外国語大学日本学研究センターの諸先生方、院生の方々に貴重なご意見、ご助言を賜った。この場をお借りしてお礼を申し上げる。

なお、本稿は、「自然談話の中の引用表現の実態と分析」（高崎みどり）（『お茶の水女子大学 人文科学研究』第6巻 2010年）と一部重なるところがあることをおことわりしておく。